様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：１２６０６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２０９８

研究課題名（和文）宗教的マイノリティの文化表象―インドネシア、バリ島ムスリムの芸能民族誌

研究課題名（英文）Cultural Representation of a Religious Minority: An Ethnography of Muslim Performing Arts in Bali, Indonesia

研究代表者
城島　亜子（増野亜子）（Shiroshima (Mashino), Ako）

東京藝術大学・音楽学部・講師

研究者番号：５０７４７１６０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：本稿はヒンドゥー教徒が多数派であるバリ社会において、宗教的マイノリティであるムスリムの伝統芸能に光を当て、従来ほとんど研究されてこなかったその実態を明らかにした。
　調査から下記の四点が明らかになった。(1)複数の集落がイスラム独自の舞踊、宗教詩朗誦、器楽合奏等の伝統を維持している他、より現代的な音楽の実践も浸透している。(2)各集落が地理的・歴史的な背景を反映した固有の表現様式を確立している。(3)芸能実践がマイノリティとマジョリティの関係性の構築と維持に重要な貢献をしてきた。(4)バリのムスリム文化が周辺他島と地域横断的に連続性をもつ文化的ネットワークの一部であることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：This research shed light on the traditional culture of the Muslim Balinese, a religious minority on an island where Hindus are in the majority, focusing on their performing arts which have largely been disregarded in earlier studies.
Four points emerged: (1) Several Balinese Muslim communities have maintained their own traditional art forms, as well as more modernized forms; (2) Each local community has established its own performing style, reflecting its geographic and historical background; (3) The performing arts have contributed significantly to establishing and maintaining the social relationship between the religious minority and the majority; (4) The culture of Muslim Balinese is a part of the broader Muslim cultural network and connects them with other Muslim communities spread beyond the island through cultural continuity and similarity.

研究分野：音楽学

キーワード：芸能　マイノリティ　宗教　イスラム　音楽　民族誌　バリ

１．研究開始当初の背景

インドネシア共和国バリ州（バリ島）は、世界最大のイスラム人口を抱える同国において唯一、人口の９割をヒンドゥー教徒が占める。従来のバリ研究はヒンドゥー教の社会と文化に集中し、この島に数百年の歴史を持つムスリム集落が存在し、独自の文化や慣習をもつことは看過されがちであった。特にバリのムスリムの芸能や音楽に関する先行研究はごく少数で、その実態はほとんど知られていなかった。

一方、近年インドネシア研究では、宗教、特にイスラム教の文化に学術的関心が集まり、議論が活発化している。また多宗教・多文化共生に関する一般的な関心も強まっている。こうした背景から、本研究は「インドネシア全体としては多数派であるが、ヒンドゥー教徒が多数派のローカルなバリ社会においては少数派であるイスラム教徒」という独特の位置にある、バリのムスリムの芸能に光を当て、その実態を明らかにすることを目的として実施された。

２．研究の目的

本研究ではバリのムスリムの音楽・芸能の実践状況を明らかにするとともに、それらをより広汎な文化的・社会的な文脈の中に位置づけることを目的とする。

第一の目的はバリのムスリムがどのような芸能を、どこでどのように実践しているか、その表現様式と実践・伝承の現況を明らかにし、バリのムスリムの音楽文化の全体的な概観を得ることである。分析と考察の足掛かりとなるような基礎的な情報収集のために現地調査を行うことが必要であった。

第二の目的は、現地調査で得られた資料をもとに、バリのムスリムの芸能文化の歴史的変遷、文化的固有性、地域社会における役割等、固有の社会的文脈を考察することである。芸能や音楽はムスリム固有の信仰や慣習とどのように関わってきたのか。ローカルな地域社会においてムスリムとヒンドゥー教徒は、どのような社会的関係を歴史的に培ってきたのか。両者の関係性は音楽や芸能の活動や様態にどのような影響を与えてきたのか、そしてバリのムスリムとインドネシアの他島のムスリムの音楽文化の間にはどのような関連性を見出すことができるのか、こうした疑問に答えることが研究の目的である。

3. 研究の方法

研究開始時点でバリのムスリム文化および芸能に関する先行研究は少なかったため、現地調査による情報収集を重点的に行った。3年間に計8回約20週間にわたるインドネシアでの現地調査を行った。主に口頭の情報を頼りに芸能を実践しているムスリム集落の所在を突き止めることから始め、現地へ赴いて聞き取り調査を行い、芸能上演を観察して、パフォーマンスの記録（映像・写真を含む）と、芸能実践者へのインタビューを行った。

またバリのムスリムは基本的に他島からの移住者を祖先としているため、ジャワ島（ジャワ島中部バニュマス地方、ジャワ島西部クニンガン及びチルボン地方）とロンボク島各地の関連芸能に関しても同様の現地調査を行い、比較考察を行った。

これらの現地調査の成果と文献資料から得られた情報に基づいて論文執筆と学会発表を行い、インドネシア他地域のイスラム文化・芸能研究者との議論や情報交換を行いながら、バリのムスリムの音楽・芸能活動の独自性と他地域との共通性について考察した。

４．研究成果

(1)バリのムスリムの芸能概観

調査からバリのムスリム集落における下記の芸能活動が確認された。

(a) 太鼓中心の器楽合奏ルバナ rebana
(b) 宗教的な詩の朗誦
　(b1)太鼓伴奏を伴う宗教詩朗誦(ブルダ Burdah)
　(b2)太鼓伴奏を伴わない宗教詩朗誦（バルザンジ Barzanji 等）
(c) 歌と器楽伴奏を伴う男性群舞（ルダット rudat）
(d) 歌と器楽合奏による現代的な宗教歌謡
　(d1)インドネシア語の歌詞をもつもの（カシダ qasidah）
　(d2)アラビア語の歌詞をもつもの（ハドラ hadrah）
(e) 太鼓伴奏を伴う伝統武術プンチャック・シラット pencak silat の演武
(f) その他　ザピン zapin（舞踊と音楽）、パントゥン pantun（詩歌）等

(2)各芸能の実践状況

これらの芸能ジャンル個々の実践状況に関して、下記のような概観が得られた。

①バリのムスリム集落ではアラビア語の宗教詩朗誦および宗教詩を用いた舞踊が広範に行われており、そのいずれもが共同体を基盤として実践されている。

なお調査後半にヒカヤット hikayat と呼ばれるムラユー語（マレー語）による宗教詩・物語の朗誦が現在も伝承されているという情報を得たが、実際に上演を確認する機会には恵まれなかった。

②芸能の上演機会として一般的に預言者ムハンマドの生誕祭マウリッド mawlid や断食明けのイドゥル･フィトリ Idul Fituri、結婚式や割礼等の祝祭日が重要である。この他に県主催のフェスティヴァルや全国的なムスリム芸能の競技会などで上演されることもある。

③最も広く演奏されている楽器はルバナ rebana と総称される平たい枠太鼓である。ルバナのサイズや構造には複数の種類が

あるが、(b2)をのぞくほぼすべてのジャンルに用いられており、バリのムスリムの最も典型的で一般的な楽器であると言える。

④インドネシアの伝統武術プンチャック・シラットはそれ自体が一種の芸能として器楽伴奏を伴うデモンストレーションとして実演されるだけでなく、ルダットやブルダのような舞踊の身体技法全般に大きな影響を与えている。

⑤上記芸能のうち最も広汎に実践が行われているのは(d)現代的な宗教歌謡のカシダとハドラ、(b2)のバルザンジであり、地図1の調査地以外にも広く実践されている可能性が示唆された。

⑥ルバナ合奏、ブルダ、ルダットはバリ内部でも限られた集落、特に数百年の歴史をもつ古い集落でのみ実践されており、古い歴史をもつ「伝統的」芸能とみなされている。

⑦上記の(a)～(e)は複数の集落で実践が確認されたが、それ以外に限定的な地域でのみ実践されていた事例（たとえば西部ムラユー系集落の舞踊音楽ザピン zapin 等）がを(f)その他と分類した。今後の調査で他地域・他種目の実践情報が得られる可能性もあることを付記しておく。

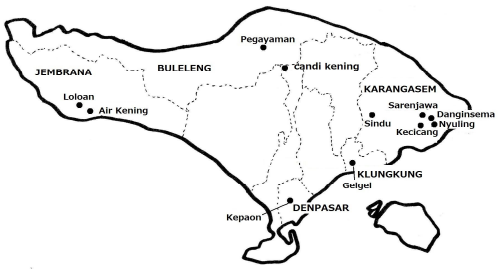
### (3)「伝統的」芸能の伝承状況と他島の芸能との関係

上述のように現代的なカシダやハドラが予想外に広範囲で実践されていることが調査から分かってきた。ジャワ島との人的往来や、メディアやインターネットの発達によってバリ各地に浸透したようである。

一方「伝統的」音楽や芸能の歴史に関する情報は全般に乏しく、起源や伝播の過程を具体的に特定することは困難であった。しかしこれらの芸能は先祖代々継承されてきた貴重な文化遺産と考えられていたことから「現代的」音楽については今後の調査課題とし、主にルバナ合奏、ブルダ、ルダットの3種に焦点を絞って調査を進めることにした。

調査ではバリ各地の計 11 集落でルバナ合奏、ルダット、ブルダの実践を確認した（地図１参照)。

地図１　バリ・ムスリム芸能調査地




11 の集落はカランガスム、クルンクン、デンパサール、タバナン、ブレレン、ジュンブラナの6県に散らばる。民族的起源はそれぞれ異なり、ロンボク島を起源とするササック系、スラウェシ島南部起源のブギス系、マレーシア東部及びカリマンタン島西部起源のムラユー系、ジャワ島起源のジャワ系、それらの混合集落が存在する。

調査では芸能と、各集落の起源やローカルな歴史的背景との関連を考察した。その主要な調査成果は下記のとおりである。

① 器楽合奏ルバナは現在ニュリンとダギンスモの 2 集落のみに存在する。両者は共にバリの東隣に位置するロンボク島のササック人を起源とする集落で、この合奏形態も基本的にロンボク起源と考えられる。類似の音楽はロンボク島西部のササック集落で現在も演奏されている。一方で合奏の構成や演奏方法にはバリのヒンドゥー教徒のガムラン・アンクルンとの類似性が高く、ササック文化とバリヒンドゥー文化の興味深い文化的混淆が見られる。

② ルバナ伴奏による宗教的朗唱ブルダは、かつては広汎に実践されていたが現在はサレンジャワ（ジャワ系)、クパオン及びプガヤマン（ジャワ+ブギス系)、ロロアン西（ムラユー系）の 4 集落でのみ確認された。いずれも大型のルバナを使用し、同じアラビア語詩を朗唱する点が共通している。

同様にルバナを伴う宗教詩の朗誦はジャワ島各地やロンボク島等、インドネシアのムスリムに広く実践されており、類似性が指摘できるが、上演の文脈や演奏方法等に地域的な多様性がある。またバリ内部でも実践方法に地域の固有性が見られ、伝承を有する集落の民族的起源も多様で、伝播の過程ははっきりしない。

③ 男性群舞ルダットはゲルゲル、サレンジャワ（ジャワ系)、プガヤマン、クパオン（ジャワ＋ブギス系)、ロロアン東（ジャワ＋ムラユー系)、クチチャン、シンドゥ、チャンディ・クニン（ササック系）と 8 集落で上演されている。いずれもルバナ中心の打楽器伴奏と歌を伴い、舞踊に伝統武術プンチャック・シラットの影響が強い。また隊列による行進や衣装等の点で近代的なミリタリズムの影響が感じられる（写真１参照)。

写真１　ゲルゲル集落のルダット上演

各地のルダットには固有の身体技法、衣装、歌の特徴があり、集落外部で上演される機

会が比較的多いことからも、集落の文化的なアイデンティティーの表象として重要な役割を担ってきた。

ロンボク島やジャワ島各地のイスラム社会にもルダットと呼ばれる芸能が存在し、集団性、ルバナの使用、シラットの身体技法、隊列などミリタリズム的な配置等、様式上の共通性が高いこと、そして各地の「ルダット」がそれぞれに固有の多様な表現様式を発達させてきたことが明らかになった。また特にジャワ島には、上述のような類似の要素を持ちながら、基本的にルダットとは別形態・別名をもつ芸能が複数存在することも明らかになった。インドネシア各地に存在していることも分かった。

バリ島とそれ以外の地域の類似芸能の芸能相互の比較考察は将来的な課題として残る。表現の共通性に注目することで地域を横断する文化ネットワークの形成と伝播過程の考察が可能になるだろう。

④特にバリ島西部のジュンブラナ県には他のムスリム集落に存在せず、集落限定的に実施されている独特の舞踊や音楽のジャンルがいくつか存在する。その理由としては、この地域に集住するムラユー系の人々の文化が継承されている可能性がある場合と、西側に位置するジャワ島東部との距離が近いために人的交流がさかんであり、そのためにむしろ他地域よりも多様な芸能活動が維持されている場合がある。今後さらに詳しい調査が必要な地域である。

### (5)本研究の学術的意義

本調査では、先行研究のほとんど存在しなかったバリのムスリムの芸能文化、特に伝統的なジャンルに光を当て、主要な表現様式、伝承地域、上演慣習等を明らかにした。この成果には単なる事例研究を超えた学術的意義がある。

第一にイスラムの宗教的音楽観と人々の伝統実践の関係を考える上で、興味深い実例を示した点である。

イスラムでは教義上、音楽や芸能に対して否定的な立場があることが知られている。しかしインドネシアでは一般に宗教と結びついた慣習や行事の中で詩の朗誦、楽器演奏、舞踊などの表現が発達してきた。バリのムスリムにおいてもイスラム信仰と音楽の結びつきは、表現方法（ルバナ以外の楽器をほとんど使用しないこと、声表現の重視）、特にアラビア語の宗教詩の多用、マウリッドなどの半宗教的祝祭日における上演等に顕著にみられる。彼らがムスリムとしての信仰や戒律に適合した表現や実践の方法を意図的に選択し、解釈していると考えられる。

調査ではバリのムスリムの音楽と芸能が他島の他のムスリムの文化との類似性・連続性も明らかになった。これらは伝播年代の不明な「伝統的」芸能からごく最近のハドラやカシダの流行に至る長期間にわたる、地域横断的な文化交流の存在を浮き彫りにする。こうしたムスリムの文化的ネットワークが継続的・累積的にバリのムスリム社会に影響を与えてきたと考えられる。

インドネシアにおけるイスラムと音楽・芸能の関係については、近年学術的議論が活発化している。本調査の成果は特にジャワやロンボクの音楽文化との関連を明らかにし、インドネシアにおけるムスリム文化のネットワークをより広域的に考察する上で、有意義な資料と視点を提供した。今後、東南アジアのイスラム文化についての、より広域的で学際的研究が国際的に展開していくと思われるが、本研究はそのなかで重要なピースとなりうる。今後さらに他地域の研究者との連携や情報交換を進めることが重要である。

本研究はまたバリを多文化・多宗教社会としてとらえなおし、その中で信仰の異なる他者との関係性と交渉の産物としてムスリム文化を位置づけたことにも意義がある。

バリのムスリムの芸能活動は、他島のムスリムだけでなく、バリのヒンドゥー教徒の文化とも文化的連続性をもっている。両者の交流の歴史はルバナ合奏のような音楽様式の中に表れるだけでなく、ヒンドゥー教徒の儀礼におけるムスリムの演奏事例のような興味深い複数の接点を示している。

芸能は宗教の差異を超えて共同体を接続する重要な役割を担ってきた。ヒンドゥー教徒を含む公の場で芸能を上演することで、ムスリムは地域共同体の一員としての存在感を獲得し、自らの文化的なアイデンティティーを表現してきたのである。

宗教や民族を要因とする軋轢や摩擦が深刻化し、それに対抗して多様性の維持や社会的包摂が従来以上に必要となった現代社会において、芸能や音楽を通した相互理解や包摂の可能性を、実際の事例から明らかにしたことはマイノリティ研究の視点からも有意義である。

本研究は学術的に未開拓であったバリのムスリム芸能に関する最初の本格的な調査であり、多くの新事実を明らかにすると同時に、より広汎な視野に基づく、より深い考察を展開するための礎の一部となるものであった。

## ５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2　件）


1. Mashino（Shiroshima）Ako. “Tradition, Custom, and Religiosity: Muslim Balinese Interpretations of their Performing Arts.” Proceedings of the 4th Symposium: the ICTM Study Group on Performing Arts of Southeast Asia, edited by Tan Sooi Beng, Jacqueline Pugh-Kitingan, Desiree A. Quintero. Penang: School of the Arts,

Universiti Sains Malaysia. pp.203-206. 2017. **査読なし**

2. Mashino（Shiroshima）Ako. “Dancing Soldiers: Rudat for Maulud Festivals in Muslim Balinese Villages.” *In* The Fighting Art of Pencak Silat and its Music: From Southeast Asian Village to Global Movement. Uwe U. Päetzold and Paul Mason (eds.) Leiden: Brill. pp.290-316. 2016.**査読なし**

**〔学会発表〕（計　7　件）**

1. Mashino (Shiroshima) Ako. “Musik rebana Muslim Bali, sebagai jembatan sosial antara umat Hindu dan Islam”: (keynote speech: International Seminar at Padangpanjang Indonesian Art Institute, “Art and Creativity,” in Indonesian), Padangpanjang: Indonesian Art Institute Padangpanjang. 2017.

2. Mashino (Shiroshima) Ako. “Muslim Balinese performing arts for Hindu rituals and public events,” International Council for Traditional Music, World Conference, University of Limerick: Ireland. 2017.

3. **増野（城島）亜子「バリのムスリムの枠太鼓―宗教的マイノリティの音楽文化」、東洋音楽学会大会、沖縄県立芸術大学。**2017.

4. **増野（城島）亜子「宗教的マイノリティの芸能実践と社会的関係の構築―バリ島ムスリムの芸能民族誌に向けて」、第 50 回日本文化人類学会大会、名古屋：南山大学。**2016**.**

5. Mashino (Shiroshima) Ako. “Forming Socio-Cultural Networks through Performing Arts: The Case of Muslims in Bali”, International Council of Traditional Music, (ICTM), Study Group of Music and Minorities Symposium, Rennes: Universite Rennes 2. 2016.

6. Mashino (Shiroshima) Ako. “Tradition, Custom, and Religiosity: Muslim Balinese Interpretations of their Performing Arts.” Symposium of International Council of Traditional Music, Study Group of Performing Atys in Southeast Asia, Penang: Cititel. 2016.

7. Mashino (Shiroshima) Ako. “Past and Present in the Performing Arts of Muslim Kampung in East Bali,” Lectures: Islam and the Performing Arts in Indonesia (symposium), Performing Indonesia: Islamic Intersections. Washington D.C.: Corcoran School of the Arts and Design. 2016.

**〔図書〕（計　0　件）**

**〔その他〕ホームページ等**
**バリのムスリムの音楽と芸能（日本語）**
(**英語版**:Muslim Performing Arts in Bali
**インドネシア語版**: Seni Pertunjukan Muslim Bali)
https://senimuslimbali.weebly.com/

**６．研究組織**
**(1)研究代表者　城島（増野）　亜子**
（Shiroshima (Mashino) Ako）
**東京藝術大学・音楽学部・講師**
**研究者番号：**50747160

**(2)研究分担者　なし**
（　　）
**研究者番号：**

**(3)連携研究者　なし**
（　　）
**研究者番号：**

**(4)研究協力者　なし**
（　　）